

生命の實相 第8卷

觀行篇

(133)

○どんな苦勞があつても、因縁によつて世話させて頂いていると思えばありがたいばかりの一筋である。人間は他のために苦勞をさせられているのではなく、自分の魂を高め上げ、浄め上げるための修行として苦勞を恵まれているのである。学校は先生のために勉強するのではなく、生徒自身の向上のために勉強するのである。人生は魂の勉強する学校である。苦勞は教科書であり、苦勞させて下さる人は皆自分の先生である。われわれは苦勞させて下さる人に感謝して拝まねばならない。これが解つたら世の中にありがたくないものは一つもないのである。これが解つたら人生は幸福なばかりである。豚なら幸福とは快樂のことだと思つているかも知れぬが、本当の人間は苦勞の中に喜べるものである。(月刊『生長の家』の巻頭言より)

○病氣を口実にしているようなことでは病氣は治らぬ。

○感覺の歡びを追うても飽くことを知らないのは、感覺の歡びは本来無い歡びであるからである。本来無い歡びをいくら積み上げていっても、けつきよくわれわれは空虚の歡びを感じるのであるから、渴欲飽くことを知らずに追い求めることになるのである。

○因縁の理がわかつて、まだ因縁にとらわれている者は縁覺で

あつて正覺ではない。正覺是因縁の理を説きながら「本来因縁無し」の真相を悟れるものである。縁覺是因縁の理を悟り、因縁を追うてなお因縁に墜落する。(「智慧の言葉」より)

第二章「神想觀」実修の形式ならびに注意

前述せるとろにより、「神想觀」の実修は根本的な心の調律となるのであつて、われわれはこれによつて心のリズムを浄め高め上げれば、しだいに高き靈界、天界(神界)の諸靈と交通し感應しえて、その指導を受けうるにいたるのみならず、ついには実相世界に存在する自己の生命の真相を体感体認しえて、仏陀とおなじき自由自在の境地に入ることができるものであることがおわかりになったと思います。坐禪の自修のごとく自力修行に偏せず、実修中特にそのために出現せられた守護の神の來臨を仰ぐのでありますから、修行の中途で魔障に煩いせられることがないのは、実にこの法の他法に優る所以であります。

ではいよいよ次にその実修の方法を説明することにいたします。

坐法——足は左を右の上に重ね、瘦せている人は足を深く重ねて坐り(肥えている人は親指だけを重ねて可)腹を伸ばし腰を伸ばし、胸をゆるやかに、すべて伸び伸びと、どこにも凝りを作らず脊柱を真っ直にしてお坐りください。姿勢を地球の引力という地上いっさいの生物に働いている天地の生かす力に一致させるのです。科学者は引力という名称をつけて満足していますが、引力とはなんぞやの問題はまだ科学では解

決されていません。引力とは天のイキと地のイキとの交流する一種の生命磁気の流れです。樹木でも正しく天地の方向に向いているものほど完全に生長」ます。天地を縦に貫く生命磁気の流れが、われわれの姿勢がその方向に一致するとき、われわれの生命磁気に作用して、今まで微弱であったわれわれの生命磁気が明瞭に強く発現してくるのです。物質的磁気の例を引いて言えば長年月磁極の方向へ向けておいた鉄片が磁石に化してくるのと同様です。

合掌——指を曲げず両手掌を合わし、中指先を前額中央の高さまであげ合掌します。合掌せる指先の方向は正しく天を指さします。眉間は霊能の中枢で釈迦が説法する時に靈光を放ったところです。少し修行を積めば自己の眉間より靈波が放射するのがわかってきます。朝鮮では患部に額をあてて治す治療法があります。手指および手のひらがまた靈能の中枢であります。ほとんどすべての霊的治療法では手指および手のひらを使用します。キリストは病人に手を触れて、病を癒されました。諸仏は衆生の心を救うて安心を与えられる時には、手のひらから放射する靈波を利用せられたもので、諸仏の尊像の多くはその片手を無畏施印または施願印と言って、手掌を伸べて衆生の方へ向け靈波を送っていられるのであります。そのほか密教にはいろいろの手印があって、神通力を起こすのに利用されています。次に息が靈能の中枢であります。古来日本人は息吹きすなわち息を吹きかけて病を癒しました。動物は息の通路に当たる舌をもってなめて、病を癒やし、キリストは唾液によって盲人の眼を開かしめています。われ

われは身体のどこかが痛いとは本能的に手を当てて、手の靈能を利用して病気を治そうとするのですが、手先そのものが痛ひと口にふくむかハーと息をかけて息の靈能を利用して治そうとするのであります。われわれの本能はもともとどこに靈能の中枢があるかを知っているのです。泰西最近の心霊学的実験によりまして、靈能発現の媒体となるエクトプラズムと称する一種の靈素体がマージャリー夫人その他の靈能者たちの鼻および口からさかんに流出している写真が撮れています。合掌を天地の方向に一致せしめつつこの位置に持つて来るのは、眉間、手指および手掌、息という三つの靈能の中枢を一カ所に集め今まで潜在していた核中枢の靈能がたがいにより誘導し合って、そこに一個の磁気的中心ができ、もって天地を貫く「生かす力」との感合を得るアンテナを作るのです。

招神歌朗誦——右の姿勢にて瞑目し、次の招神歌を朗誦またはあたりの事情により黙誦します。各歌二回ずつくらいでよろし。その時の氣持を整える上から回数は適宜にそれより多くとも可。

生きとし生けるものを生かし給える御祖神元津靈ゆ
幸え給え。

吾が生くるは吾が力ならず、天地を貫きて生くる祖神
の生命。

吾が業は吾が為すにあらず、天地を貫きて生くる祖神
の権能。

天地の祖神の道を伝えんと顕れましし生長の家の大神

守りませ。

歌の意味は説明の必要もないほど平明なものでありますが、第一首の「元津霊ゆ」は「元のみたまより」「大生命より」という意味であります。「幸え」は「サキハエ」と読みます。サキハエの語義は非常に意味深いものがあります。われらの幸福は自分の力で得られるものではなく、大生命から、「割きはえ」されることによって得られるのです。「割き」は「分かち与える」の意、「はえ」は「延える」すなわち「根から末へ出て来る」ことを言うので「神」という大根底から神の子なるわれらに霊を与えられることをいうのであります。霊を与えられればわれらの霊は殖えるのでありまして、これを「恩^{みたまのいづ}頼」とも「霊のたまもの」とも言うのであります。「霊のたまもの」が殖えればわれわれはズンズン生長し幸福になれるのであります。

祈り——「生長の家を通じて働き給う神よ、この合掌をアンテナとして大生命と一体にならせ給え」これを数回一意専念繰り返します。続いて「われ、今五官の世界を去って実相の世界に坐す。自分の今坐^{いますわ}っているのはこれ実相の世界——神の無限の知恵の海、無限の愛の海、無限の生命の海、無限の供給の海、一切大調和の実相世界である。この大調和の実相の世界にいて自分は今神の子として、神より無限の生かす力の供給を受けつつあるのである」と默念しますと、生長の家を通じて働き給う神の指導の霊波は、全国どこにいられる信徒にでも感じるのでから安心して実修してください。これは放送局は一つでも、全国に感じるラジオの原理と同様です。

諸君の受信装置が完全であれば、神想観の実修中にテレビジョンのように神姿を見ることもできます。実際テレビジョンのように神姿^{みすがた}を見、神告を聞いた方もあります。しかし、神姿を見るとはなんぞや？ という問題になると、これは「ラジオを聴くとはなんぞや？」という間に類似しています。ラジオの波動そのものは音であるかといえますと、音ではありません。受信機のなきところにも等しくラジオの波動は存在しています。受信機がないと、またあっても、その波長が合わないと現実的な音となつて発現しないのです。神も形であるかという形ではありません。神の救いの霊波もそれ自身、形や声でなくともわれわれが祈りを凝らし、心を整えて波長がそれに合ったとき、現実的な神の形や声に翻訳されてわれわれの霊覚の前に現われるのです。ラジオの波動が、波動それ自身は「音」でも「形」でもなく、また受信装置のないところにも伝わっているにもかかわらず、受信装置を完全に整えて波長をそれに合わせた時に、初めて音「ラジオ」と再現し、「形」（テレビジョン）と再現するのと同様です。ともかく、われわれが感覚に再現さす装置さえ整わせれば、遠隔にいても神姿を見ることができるといふほどに、「生長の家」の遠隔指導は徹底しているのです。遠隔指導よりも直接指導が良からうと思ひ、まだその境地に達せぬ人や他の霊術を修行した人から直接指導を受けると弊害があります。

呼吸と観念——瞑目してしずかに鼻より息を吸うのですが、鼻より吸うと思わず、合掌より神の生氣（息）が流れ込むと念

じて、下腹までスーウとなんの滞りもなく息（イキ、生キ、生命、神）を満たしながら「神の無限の生かす力自分のうちに流れ入る、流れ入る…」と息を吸うている間中いく回でも繰り返し、いかにも神の生命が自分の中に流れ入っている感じを深くし、十分息の入りたる時、上腹（すなわち鳩尾みぞおちのあたり）の息を下腹の方へ呑み落とす気持ちになります。それには、鳩尾を後方へ吸い込むようなつもりで凹め、同時に下腹を前方に膨らすようにして、上腹の息を下腹へ落とせば、息が臍せいかた下丹田たんでんに落ち着いて、下腹に脹はり充ちた感じが起ります。鳩尾みぞおちの息を下腹へ呑み込み落とすつものの時に、鳩尾にある息の何分の一かを鼻よりかすかに漏らして、その残りの息だけを下腹へ送って下腹に息を張り満たせば、息に無理がなくて苦しくありません。そのまま息を下腹にたまちながら、その張り満ちた感じを下腹に軽い力を入れて持続しつつ、神の無限の生かす力に満たされている自覚を深め、「神の無限の生かす力に満たされている、生かされている、満たされている、生かされている……」と幾回でも繰り返しします。息がやや保ちきれなくなると、この満たされている、生かされていると繰り返し返すごとに、短かき息を肋骨の下部の辺にちよつと吸い足してはその息を、下腹を膨ふくらしぎみにして腹へ落とし、いよいよますます下腹に息の張り満ちた感じを深めて、それができるだけ長く保ちながら「無限の生命に満たされている」「無限の生命に生かされている」「無限の光明生命がわが内に遍満している」などと同じ意味のことをいく回も繰り返しおも返して念い、（この補息すいたしは数回、できるだけ回数多く繰り返し

します）やがて自然に息をはきたくなったとき、同じ念を続けながら息をごくごくしずかに、唇を紙一枚ほど開けた間からじよじよに吐き出しつつ、その息を合掌せる両親指の間隙すきまより呼び込みます。ついでまた合掌を通して神の生氣いきが流れ込むと念じて静かに深く息を吸い、その息を臍下丹田に収め、天地無限の生かす気がわが全存在に張り詰めたる気になり、神の生命に満たされているという意味の言葉を念ずること前述のとおり、一心不乱にこれを繰り返し返すのであります。あまり簡単な同一の言葉を思念していると、人によつては、心に雑念を思い浮かべる余裕ができて、精神統一の乱れる場合があります。そういう場合には「神の生命に満たされている」というのと同一の意味の言葉をいろいろに言い方を変えて心となえ、それを氣息に合わせて一心に思念すると、精神統一ができればよいのであります。要は神と自己との分離を除とり去り、大生命の無能力に生かされているという感じを潜在意識の底の底のドン底にまでも、自覚させるために氣息の充実した感じと大生命に充ち満ちた感じとを調和させるのが眼目で、これが基礎的修行法であります。

遠隔指導のときは上記の方法によりはく息を口よりしますが、直接指導の場合は、吸い込んだ息を下腹へ落とすまでは同じで、補いきのすいたし息はあってもなくても可。吸い込んだ息を「神の無限に生かす力に満たされている」と念じつつじつと下腹に溜めておりまして、いつの間にか息が鼻より洩れているというほどの微かなはき方で、はく息を自覚しない。といつの間にか七分どおり息が下腹から減っていて、まだ三分の息が

下腹に残っている。その息の下腹に満ちた感じを失わない時に再びできるだけ緩かにふかく息を吸うようにし、息を吸う時は前のごとく「神の無限の生かす力自分の内に流れ入る」と念じ、また息がスッカリ入りきった時その息を下腹へ落として下腹をじっと張り満たし、「神の無限の力に満たされている、生かされている」と前のごとく念じ、これを繰り返します。

最初二カ月間は、一カ月に二週間以上この方法で、毎回三十分以上ずつ実修していただくのを本則とします。この修行は「生長の家」本部から毎月一定の時日を期して祈りをささげ、遠隔的に靈波を放送して指導することになっていきますから、その期日を知りたい人は各地の信徒連合会の会報をご覧ください。身体はどこにも無理な力を入れず、下腹に息の充実と共に、自己の全存在ただ天地を貫く靈なる生命に満ちて張りきり、天地を縦に垂直に貫く靈気で上下より引つ張られて、いやでも姿勢が真っ直に引き伸ばされる氣持でいるのがよいのであります。

修行中の注意——最初一、二回は肩の凝ることがあります。合掌せる両手の手首と手首の角度は六十度くらいがよろしい、この角度が広すぎると肩に力が入って凝ります。またあまり狭いのもいけません。下腹までスーウと息が来ないならば腹の伸び方がたりないのでいくぶん腹が屈かがんで腹が伸び伸びしていいためですから、もっと下腹を前方へ張り出し腹を伸び伸びさせなさい。そうすると息が下腹へ来るようになります。痩せて足の肉の薄い人は荷の位置が低すぎるために腹が

自然に屈みかげんになり、下腹にスーウと息が来ない場合が多いものです。がそんな方は足の裏を深く重ねて尻の位置を高くして坐ると、下腹がラクに前へ伸び伸びと出て下腹に息がくるようになります。右足の内うちくるぶし踝の後隣にできる窪みに左足の親指を当てるがよい。腹を前へ張り出すといくぶん身体全体が後方へ傾きますが、合掌が身体の前方に出ているので、いくぶん身体が後方へ傾いたくらいで、全身の重心が垂直に丹田に落ちるようになるのであります。それからまた充たされた感じを持続するための吸い足しの息は短かく、新たに吸い始める息は静かに長きがよいのであります。なお息についての注意は次節を見てください。

修行中の現象——手掌に感電するような感じがすることがあります。姿勢を天地の生命磁氣の方向に一致させ、人体三カ所の生命磁氣の中樞を一力所に集めたために、潜在していた生命磁氣が濃厚に発現した証拠です。手が振れ出したり、身体が振動したりすることがあります。生命磁氣を利用して潜在ひょうれいせる憑ひょうれい靈が浮き出してきた場合と、本能的に自分の病患部を自動的に治す場合とがあります。他人の病氣治療には、この生命磁氣の濃厚に発現した手掌を患部に十数分間触れているだけでも治癒を促進します。靈動は無く静寂を可とします。靈動を歓迎すれば、浮き出してきた靈がいつまでも去りません。

もし靈動が起これば十数分間靈動のままに身体をまかせていると、身体 of 凝りと無理がとれて心身が生まれかわったような爽快な感じになりますから、その時意志をもって靈動を

止め、元の姿勢に帰りて、なおも専念精神を統一し深く神と一体であることを念じていますと、深い無我の「大虚無即大実在」の世界に入ります。この「大虚無即大実在」の世界へ入って、その底から導かれてくる生活こそ「本物の生活」で、日常生活そのままが欲して違わざる生活になるのであります。「靈覺の靈覺とすべきは靈覺にあらず」で、イザという時には判断が狂ったり、靈告が得られなかったりするような靈覺ではなんにもなりません。日常生活そのままが「大虚無即大実在」に根が生えたような、大安心、無恐怖の生活になることが極致であります。

神想観実修の注意および自己治療法

問——神想観では「合掌から神の息が流れ込む」または「神の無限の生かす力が流れ入る」と念ずるのだそうですが、神とはわれわれのように息をしているものでしょうか。

答——「神が息をする」というよりも、神そのものが「イキ」であります。ここに言う「イキ」とは「イキル力」で空気のことでありません。われわれがイキをするのはただ空気中の酸素を吸うためだと思っている方があるかもしれませんが、本当は空気の奥に「イキル力」を吸うのです。われわれ自身の本体は「イキル力」でありまして、神はその「イキル力」の大本体であります。それで「イキをする」とは、大本体の「イキル力」から常に「イキル力」を送ってもらっていることであります。だからイキをする間は、われわれは死なないでイキているのであります。われわれが、「イキている」

とは「イキをしている」と言うことであります。言いかえると、大生命の「イキル力」とつながっているということです。聖書に神が人間を造って息を吹き入れ給うたとあるのは「生きる力」を与え給うたことです。こんなわけで「神の息が流れ込む」と念ずるのが変に感じられる人は、「神の生かす力が流れ込む」と念じられるがよろしい。どちらでも同じことであります。

かつて宮崎安右衛門さんが「神とはなんぞや」ということに真剣に悩まれたことがあります。氏はそのころ毎日野原へ出てひざまずいて天を仰いで「どうぞ神さまを知らしてください」と泣いて祈り続けられました。けれども答えはありません。ますます熱心に祈りつづけられましたが、しかしそれでも答えはありません。氏はついに「神を知らしていただけなくらいなら生きていてもしかたがない。もう死のう」こう思っている樹の枝に縄をかけて縊死しようとした。その瞬間、天から氏に言葉が聞こえてきました。どんな言葉だったと思います。「神とはイキだ！」この天の声を聴いたとき宮崎安右衛門さんは初めて神を知られたと言います。そうです、神とはそれみずから「イキル力」であり、同時に「万物を生かす力の大本体」です。だから「神想観」の招神歌には「生きとし生けるものを生かし給える大本体——」と呼びかけてあるのであります。

問——「神想観」実修中靈動が起こって自然に手の位置が変化し、自動体操のようなことをしますが、手の位置を強いて最初の位置にもってこようとすると足が痺れます。

答——靈動に合掌を濡手の水を切る形で打ち振るのは障碍の靈が浮き出したのです。靈動を止めて聖經を朗読するがよろしい。毎日この法を続け聖經の功德にて障碍の靈が帰順して守護靈となれば靈動が静かになります。自己治療の靈動は多く肉体の故障を自動的に揉むような形で起こったり、脊柱が前屈みになっている人は後へグッと反ってきたり右へ彎曲している人は左へばかり身体を屈げる運動を始めたり、肩胛骨の位置に異状のある人は手を振り子のように振ったり、水車のように回転させたりします。中には「神想觀」実修中内臓に靈動を起こしてグウグウ胃が鳴ったり、クルクル腸が鳴ったりすることもあります。すべて生きる力が衰えていた箇所を生かす運動が起こるのです。自動体操式の運動は十分間ばかり放任し、それ以来は意志で止めて静肅に神想觀するがよろしい。

問——わたしは息を口からはき出せば、なんだか充たされるという感じよりも空虚になったような感じがしますので「無限の生命に充たされ生かされている」という觀念が動揺します。

答——息を口からはくということは決して必須の要件ではありません。直接指導する時には指導者が生命磁氣を補給しうる便がありますので、呼く息も鼻から静かに感じぬほどにはくのです。遠隔指導においては、指導者から生命磁氣が直接加わらず実修者自身で生命磁氣をいっそうすみやかに発現せしめる必要があり、したがって眉間、手掌、息吹という三カ所の靈能の中枢を一所に近づけて、潜在している生命磁氣が互いに補い相扶けて、早く発現状態になるように合掌を息の

かかる位置に持ってきます、すなわちこれはいわば生命磁氣発現の速成法です。息をはく時は「無限の生命に充たされ生かされている」と念ずるのが不自然のように感じられるのは「心」が「息を出す」ということに引っかかっているからです。「いま息をはいている」と判然とわかるほど強く息をはき出さず、下腹をいくぶん膨らせ、息を下腹に保留しておれば自然に息が漏れる、その漏れる息を息吹きとして唇の隙から手掌に吹き込むのです。口から息をはくために、その方に氣がとられて「充たされる」という気分にならなければ、呼氣の際には「今吸い込んだ宇宙無限の生命はこの手のひらに集まる」と念じられてもよろしい。この觀念法でかえって精神統一ができ、早く生命磁氣の発現する人もあります。また、息をはくときに、「今吸い込んだ宇宙無限の生命が掌に吹き込まれて手より肘の方へ両肢から下腹の方へと順次伝わって全身に張り満ちる」という感じになるがよろしいのであります。いずれにせよ掌中に息を口から吹き込む修行は生命磁氣発現の速成法として行なうので、直接指導またはこの修行法にて生命磁氣が強く発現した後は呼吸とも鼻からのみするのであります。すなわち一旦吸い込んだイキを常に下腹に保っていられますと、一杯に吸い込んだイキのいくぶんは、いつの間にか自己の生命に吸収され、いくぶんは氣づかないうちに鼻孔より漏れ、なおなお息がはいるようになっていきますので、また息を吸いたしては下腹に納め、またしばらくして息を吸いたしては下腹に納め、こうした吸うイキのみが意識にのぼり、はくという觀念は全然消えて全身ただイキル氣(す

なわち神」に張りきり満たされ「神と一体だ」という感じが自己の全存在をつうじて感じられるようになります。こうして神我一体感が深まってきたとき念ずる言葉は、神と一体の権威で命ずる言葉となりますから、「神光あれと言ひ給えば光ありき」と聖書にあると同様に、自己の身体に対して絶対権威をもって作用はたらきかけるのであります。すなわち精神が統一して神我一体感が深まったとき「われ神の権威をもって命ず、心臓の血液循環はよくなる。生理作用は完全に整う。人間は本来神の子であるからすでに無病で健康である」と神我一体感後、一回十分間くらい、心に繰り返し念ずるのです。

朝夕二回ぐらい病気の種類により、この念じ方は自己の病気に適するように変えます。ともかく、「本来神の子に病気はない。すでにわれは健康である」とはどんな病気にもぜひ念ずべき事柄で、その他のことは胃腸が悪ければ「胃腸の血液循環はよくなり消化吸収同化力は強くなる」とか、痛みがあれば、「本来肉体は物質だから痛みはない、痛いと思うのは心の迷いだ。迷いは消え痛みはなくなる」と心に繰り返し念じ、病源がバイ菌だと信じられている場合には、その信念を打ち消すために「いっさい生きとし生ける物は実相の世界において調和している。バイ菌が人間を害しているように見えているのは恐怖心の現われで虚妄うそである。バイ菌といえども人間と完全に調和していて害するということはないのである。自分はいっさい生物と調和して平和である」というふうに念じます。つまりどんな病気でも症状および病源に応じて、望まない症状および病源をば念力で打ち消して、あとへ望む

健全状態ができてくると念ずるのです。重病人または咳などで精神統一ができない時は、朝起きた時と眠りに入る前とに臥床したまま、上述のごとき病気を打ち消し健康を招よぶ言葉を自分の耳だけに聞こえるほどの低い底力ある声で、五分間ほど自分の心に言っかけて、あとは「コトバは神であるから言葉の力で必ず治る」と信じて病気のことをぜんぜん忘れるようにしていると必ず治ります。病中は読書を本全集または『生長の家』に限るのがよろしい。薬の広告や、生理学解剖学書などを見ると、病的観念の暗示を受け、あの薬も欲しいとか、いろいろ迷って治るのが遅れます。

問——わたしは「神観」を実修していますと、手が自然にさがってくるのですが、下げたままでよろしいでしょうか。無論手がさがると息と掌とは遠ざかります。

答——掌の中に一旦ムズ痒いような感じや、蟻の這うような感じや、電氣がかかるような感じが起こるようになった程度に達した実修者は、手は無意識に下がれば下がってもよろしいが、手が顔の前にある方が精神統一しやすいのです。手にそういう感じが起こってきましたら、もうその人の生命磁気は顕在状態になったのです。その人の生命磁気は顕在状態になるとは、ラジオの受信機の蓄電池に充電されたのと同じことで、靈波の受信装置が完備したことです。しかしこの時どの靈波に自己の波長を合わすかということは自身の観念の持ち方にあります。なんでもよい、早く靈覚が欲しいとか、予言力がほしいとか、崇拜の対象がアヤフヤな念願では時として低級な靈魂が憑よってきます。それを防ぐために、われらは、

「招神歌」と「祈り」とによって宇宙最高唯一神に心を馳せ、同時に「生長の家の大^{ガイデアン・エンゼル}天^{テン}使^シ」を実修の指導者として招神し、その守護を仰ぐのであります。

問——「どこにも無理な力を入れず」とありますが、下腹の力を抜くと腹が頼りなくて、息を下腹に保っていることができません。

答——下腹の力を抜くのではなく、下腹に適当に力を保っている方がよいのです。無理な力がいけないので、無理でない力が自然に入ることには結構です。下腹に力が適当にはいっていないければ、息をはくときにあまり早く息が出てしまつて、息をかすかにはくことはできません。息を下腹へ吸い落として息をこらえているときには、下腹を膨らす気持でいられれば、自然に丹田に軽く力が這^{はい}入ることになりますのであります。息をはくときにもこの調子で、下腹を膨らす心持でいくぶん力を入れていられると、はく時でも充たされているという感じが保てるものです。

問——わたしは胃拡張のセイで、どうも息を下腹へ吸い落とそうと思うと胃袋を圧迫して苦しいのです。よい方法を教えてください。

答——そういう方は別に「神想観」を実修せられないでも、聖經『甘露^{かんろう}の法雨^{ほうう}』を毎日一時間または三十分ずつ祖先をお祭りしてある霊前でお経がわりにお読みになるとよろしい。

そうすると患者自身も悟りが開けるとともに、迷っている祖先縁族の霊が悟りを開いて守護霊となってくれるので病勢が衰えてきます。病勢が衰えてから神想観をせられるとよろ

しい。心さえ治れば本書を読むだけで大丈夫治るのです。「生長の家」の修行は心が主で、形式は心を整えるためにするのでありますから形式が気にかかつていろいろと疑惑が湧くようではなんにもならないのです。また、胃拡張の人の呼吸はこうせられるがよろしい。——息を吸うとき肋骨の下部を前と左右にひろげて、その部分に主として吸い込み、息を下腹へ落とすときには全部の息を下腹へ落とそうとせず、心窩^{みぞうち}を後方へ引っ込めて、心窩へはいる分量だけチョット息を鼻から漏らし、残りのイキを下腹だけを膨らしてそこへ入れるような気持で、イキをその下腹に保ち続けながら、「無限の生命に充たされ生かされている」という意味を念じていると、吐くという感じがせずに、いつのまにか息が出ているので、また肋骨の下部へ息を吸い直すようにします。無理にグングン息を下腹へ押し下げる必要はありません。

問——わたしは直接指導を受けたいと思います。直接指導では指導者から生命磁気を補給してもらえようですが、遠隔指導では実修者自身の姿勢と呼吸とによって生命磁気を発現せしめるので、自修のような気がして頼りないです。

答——遠隔指導は姿勢を最も有効に利用して生命磁気を発現さすという点からのみ言えば、自修であります。霊波はいかなる遠隔地にも達しますが、生命磁気は一種の磁気的作用で物理的磁力と等しく磁場^{じじょう} (Magnetic field) すなわちその磁力圈内に属する一定距離にのみその影響をおよぼすのです。強力な磁石の側に鉄片を置けば、その鉄片が磁石になってしまふ。直接指導はそれと同様で、強力に生命磁気を発現してい

る指導者の一定距離内で実修すれば、その人の生命磁気がすみやかに発現するのです。磁石は鉄片を磁化することができ、磁化された鉄片はまた磁石となって、他の鉄片を磁化することができ、順次どこまで伝えても元の磁力は衰えないのです。生気術でも、自健術でも、鎮魂でも、手のひら療治でも、すべて潜在していた生命磁気を表面に発現せしめる方法で、おのおのその特殊の方法によって自己の生命磁気が強く発現したならば、今度は習ったと同じ形式で他の人に伝えてあげれば、順次いく人でも磁化しうるのです。諸方で伝授料や講習費を徴して教えている霊的治療法は、たいてい何かで修行して自己の生命磁気を発現した甲の人が、乙の人に自分の生命磁気を及ぼして、乙の人に潜在している生命磁気を発現せしめるだけの方法であります。

自己の生命磁気を強く発現さすだけで治る病気もあります。その人に生命磁気が発現するということは、その人が霊波のラジオ受信機となるに必要な蓄電池に充電したことになります、したがって霊界の諸神諸霊の霊波を受けやすくなるのであります。霊媒すなわち巫女すなわち「神がかり」になる人を養成するのも、要するにその人の生命磁気を発現するように指導すればよいのです。「神がかり」とは神の受信機となることです。神から放送される霊波を受信して、それを視覚なり聴覚なり、あるいは無意識に口について出る言葉なりに再現させるのが、「神がかり」であります。釈迦はむろん「神がかり」であり、エホバの言葉を語った旧約の預言者たちはすべて「神がかり」であり、キリストも「神がかり」であり、

神の黙示に接して『黙示録』を書いたヨハネも「神がかり」であり、それからズツと品等がさががつて稲荷下げや、いろいろの死霊を招び出す霊媒となる人も「神がかり」であります。だから「神がかり」と一概に言っても、ピンからキリまでいろいろの等級があるのです。慣れない人は「神がかり」と言えば、どんな神が憑つてきても——言いかえると、どんな神の霊波の受信機になってもありがたりますが、宇宙最高の創造神は霊媒的に憑らず、それ以下の神または霊物にはいろいろの階級品等があるので、時に低級霊の霊波の受信機になりますとかえって病気を増悪することになることもあります。ある人はひとから霊術を習い受けてこれを人に施術してみると、病気がかなり治るので自分の家族に施してみると、その家族が狐憑のような囃言を言う精神病になった例もあります。これは低級霊の霊波の受信機になったのです。すべて生命磁気の発現をうながす霊波を受けるとか自修するとかすれば、その人に潜在していた生命磁気の発現をうながし、その人を霊波の受信機としますので、その時いかなる神または霊の受信機となるかが問題なのです。坐禅などで精神統一していても、なかなか本物の境地に達するには数十段階の魔境があると言われています。魔境とは、低級霊の霊波の受信機となることです。日本古来の靈法たる鎮魂においていかなる神の霊波がその人に憑っているかを批判し観察し、適当に処理する役目たる先達すなわち審神者がついていて、低級霊の霊波が来ていれば祓ってくれます。これが自修と直接指導との異なる要点ですが、直接指導と言っても、その指導者が

審神者としての真の資格を備えたものでないと、ただ、実修者の生命磁気を発現さしたままでやりっ放しにしておきますから、かえって低級霊の靈波を感じ、狐憑こひょう類似状態を起こしたりするのです。では指導者の真の資格はなんであるかと言うと、それは指導者の肉体的教養ではなく、指導者の背後にいかなる神格の高い守護神エンゼがいて、その実修を指導してくれるかということによって定まるのです。神格の低い守護神をもつ人が指導者となるならば、直接指導でも決して安心がならないのであります。かくのごとく真の指導は「肉体なる人間」がするのではなく、指導者の背後にある守護神エンゼがするのであります。生長の家の「神想観」の指導はわたしの守護神がするのではなく、今度人類光明化の大運動を神界より人間に向けて始められた、唯一神の救いの靈波の人格化なる神界の大神使たる「生長の家の神」がせられるのであります。かくのごとき高級神は距離を超越し、一身を多身に顕けんじて自由自在でありますから、この神が神想観の現場に來臨せられることは靈覺ある諸方の読者の通信で明瞭です。遠隔指導の実修日にはこの神が実修者各人に付き添うて、各人の神想観すなわち「大生命と無我一体になる修行」を助けられるのでありますから、肉体の上から言えば遠隔指導ですが、この大天使みずから神通力によって各所に顕現して指導に当たられるという上から言えば、直接指導と言えるのですから、遠隔でも直接のつもりで実修してください。『生命の實相』に時々出てくる「某月某日神示」とあるのを妙にお考えになる方もありましようが、この「生長の家の大天使」の默示であり

ます。招神歌を実修の際のたんなる精神統一の手段だから、なんでも自分の好きな言葉を唱えてよいと思っていられる方があるかもしれませぬが、すべての順序と形と式は、遠隔実修にさいしてこの靈界の大神使より直接指導を仰ぐための招神の形式ですから、あのとおりやってください。本部で指定して資格ありと認めた人以外の人から直接指導を受けたり、他の方法でおやりになって、たとい無念無想の境地になられましても、精神統一の境ほど靈に憑かられやすいものでありますから、自分勝手の方法や資格なき人の指導で精神統一をなさっていると悪靈にかかられることがあります。悪靈は本来無いのであります。迷いの靈波が感応してきて悪靈と現われるのを、修行未熟の人には避けがたいのであります。

問——わたしは神想観をしているうちに、掌に靈感または靈動を覚えるようになります、その掌を病人に触れるとその病気が治るようになりました。いかなるわけですか。

答——靈動の起こった手で病患部に触手すると病気の治ることはありませんが、これは生命磁氣（ヨーガの哲学ではプラナという）を患部に補給するからであります。プラナは活力の源泉でありまして、空氣、水、食物等から人間はそれを吸収するのであります。空氣からは最も多く吸収するのであります。神想観中に行なう完全呼吸法では、最もプラナを吸収しますから生命磁氣が最も多量に発現し、掌から最も多く発散し、それを伝えれば病気が治るのは活力が補給されるからであります。これはプラナ療法としてインドで古來行なわれたものであります。さらにその生命磁氣を媒体として病氣治し

を好むある階級の靈魂が来て治すことがあります。これは心靈療法に属するものです。いずれも「人間神の子病氣無し」の悟りから病氣の自消する生長の家正統のメタフィジカル・ヒーリングではありませんが、効果はあります。按手して神想観して光明真理を思念する場合は、これらの各種の治療原理が複合して行なわれるのであります。

第三章 無限知恵を感受する道

「生長の家」で説く本当の神というのはいつさいの創造主、無限知恵、無限生命、無限供給の大本源であります。神の知恵というのは人間の知恵才覚のような小さなものではありません。宇宙に満つる無限の英知——これが神の知恵でありまして、われわれが、神に対して心を打ち開いた程度に従って、神の英知が無限大にわれわれのうちへ流れ入ってくるのであります。わたくし心こころがなくなればなくなるほど、計らいはかり心こころがなくなればなくなるほど、神の英知はわれわれの内部にまっしぐらに流入して来て、あらゆる点においてわれわれの導きとなってくれるのであります。

だからわれわれは人間知を出して、小さな知恵でとやかく思い煩う必要はないのであります。人間心を出さない程度に应じて、われわれの知恵の個人的な局限かぎりは破れ、その程度に应じて宇宙的な知恵すなわち——神の知恵が開けて来る——計らいのない知恵——無際涯の大知恵——それが得られるのになに故、われわれは自分自身の小さな垣根の中からのみわれわれの生活の導きを得ようとする必要があるでしょうか。

天地に満つる大きな清浄な空氣——それが得られるのに、なぜわれわれは狭い室内からのみ空氣を吸おうとする必要があるのでしょうか。自然の酸素が豊富に存在するのに、なぜわれわれは人工酸素を吸う必要があるのでしょうか。われわれは大自然を信頼しなければなりません。われわれが外へ出て戸外の空氣を吸わないのは、戸外の空氣の価値を信じないからであります。信じたら必ず戸障子を解放して戸外の空氣を吸うようになるべきです。そうすると、われわれが宇宙に満つる神の大知恵に知恵の源泉を仰がないのは、要するに、神の大知恵を信頼していないからであります。信じさえすれば、心の戸障子を解放して神の大知恵を吸わずにはいられないのであります。さて、こうして、われわれが心の戸障子を完全に解放して神の大知恵に直接の導きを求めますとき、われわれ自身にすでに「神の子たる真相」が顕現され、もはや、われわれは「小知」の奴隸ではなく、学問の奴隸ではなく、權威の奴隸ではなく、無限の英知を内に包蔵し、その内なる導きに導かれている神の子そのものになってしまふのであります。

英国の大詩人ブラウニングは、真理に達した人だけあって次のように歌っています。

英知というものは常に内にある、

どんなに外のものを信じようとも

外のものからは英知は湧いてこない。

われわれにはその内奥ないおうの深い処に中心がある。

その中心に無限の真理が宿る。

その真理を発掘すること。

それをわれわれは英知を汲み出すと言うのである。

神は自己の内に宿る、英知は自己のうちに宿る、真理は自己のうちに宿る。自己のうちに、神が、英知が、真理が、宿っていないで、神とか、英知とか、真理とかいうものが自己の外にあるものならば、人間は永遠に自由になることはできないでありましょう。神とか、真理とかいうものがわれわれの「外」にはかりあるものならば、神とか真理とかに従うということは、われわれ自身が「外」から縛られることになりますので、われわれは決して自由になれないのであります。神とか、真理とかいうものが自己の「内」に埋蔵されている神性であるからこそ、神に従うということと真理に従うということが、自己に埋められている真性を伸び伸びと外に出すことになるのであります。

この、自己に宿る真理の「呼び掛け」に心の耳を傾けるとき、われわれは神の無限の英知の導きを受けるのであります。この自己に宿る真理の「呼び掛け」を指してわれわれはあるいは「良心」と言い、あるいは「神示」と言うのであります。「良心」と「神示」とは、ひつきょう同じものの半面であって、それは「より高き自我」からの啓示であり、自己の「真性」の開示であり、自己に宿る神の声であります。「神示」は絶対性のものであって、古神道の方から言えば直^{なまのびのみたま}、霊の働きであり、奇魂^{くしみたま}、和魂^{にぎみたま}、幸魂^{さちみたま}、荒魂^{あらみたま}の四魂^{ごん}が円満にそろって一つに統一された働きであります。これに反して霊示というのは、ある霊界の棲息者からの精神波動の波及によって教えられるのでありますから、その霊界の指導者が、どの程度まで、自己の「神なる真性」を発現させているか、あるいはまだまだその指導者が執着

の塊であるかによって、その霊示の特徴にも価値にも千差万別があるのです。

「霊示」は、執着あるある靈魂の指導でありますから、執着ある問題についての善き相談相手ともなり、執着あるがゆえに、また時として悪しき相談相手ともなるのです。

われわれが執着を脱する程度に従って、計らい心が無くなる程度に従って、みがきをかければかける程度に従って、内から多量に光を放射するダイヤモンドのごとく、内から示されてくるものが「神示」であります。執着の念をもって「神示」をきくがときは自己撞着^{どうちゃく}のはなはだしきものであります。われわれはその本性において神でありますから「神示」を聴くということとは、霊媒的素質の有無にかかわらず、自己の執着を脱する程度に従って、完全にできるのであります。「真の人間」は神である。だからわれわれが我執の皮をはいで「真の人間」がそこに立たるとき、その思うところ、感ずるところがごとく神示であります。ある宗教ではこれを「神格の内流」と言って霊媒の霊示とは区別している印であります。

神示は内流であって大脳に感応し、おおむね直覚的にあらわれます。霊示は外から延髄^{えんすい}に感応しおおむね霊媒式、二重人格式にあらわれます。神示は対立を絶した内からの啓示でありますが、霊示は第二者、第三者などの対立せる人格からの意見であります。神示は、我執に対して答えず、我執を捨てたとき、おのずから現われるものであります。霊示は我執にも答えてくれ、時々の中の間答を得たり、見当違いの答えで背負い投げを喰うこともあります。

ともかくも、学校教育などのごとく人間の先生に教えを乞うこともよく、霊媒によるがごとく霊界の先生に教えを乞うこともよいのでありますが、学校の先生の教えにもまちがいがあり、霊媒の答えにもまちがいがあります。ただまちがわないのは、われらの「神格」または「神性」の内流的啓示あるのみであります。だからわれらは常に自己の「神格」の内的啓示に照らして行動するのがよいのであります。

われわれが我執を空しくする習慣をつけ、自己内流の神格のささやきに耳を傾ける習慣をつけますならば、しだいしだいにそのささやきがハッキリ聞こえてくるようになるのであります。自己内流の神格のささやきはこれを聞くだけにして、無視してしまつて、そのとおり行なわないでいますと、自己の神性をあざむくことになりますから、いくら耳を傾けて自己神格の啓示を聞こうとしても聞こえなくなつてきます。だから、われわれが、自己神格の啓示をたえず聞こうとするならば、たえず「内からの啓示」に順つて、己れを虚しゅうして、生活にそれを実行してゆくということにしなければならぬのであります。

自己を虚しゅうして「内からの啓示」に従い、人間の知恵才覚をもつて計らわず、何事もその内から催してくるままに実行に押し進めてゆくことにせねばならぬと申しますと、内から不道德な啓示が浮かび上がってきた場合にも、素直にその不道德な行為を実行すべきかどうかという疑問が起こつてくるかもしれません、決してそんなおそれはないのであります。なぜなら、およそ「悪」といい「不道德」というのは、「自己」が出

るからであつて、自己が虚しくなつていないからであります。自己だけを生かして他はどうなつてもかまわない、自己ばかりを立てよう立てようと思う——これが「悪」であり、「不道德」なのでありますから、自己を虚しゅうして「内からの啓示」を聴く場合に、「悪」や「不道德」が思い浮かんでくるはずがないのであります。霊媒などにたよつて、ある事件をどうしたらよいかということを通して、この自己を立てるには、「自己を虚しゅうする」ためではなく、「この自己を立てるには、どうしたらよいか」というような利己的なことをたずねるものですから、失敗することもあり成功することもあるのです。

もし、あなたがある問題に関し静坐し、神想觀し、その時、他を抑えて自分をのみ生かすような考えが内から浮かび上がってきます場合には、それは真に「自己神格の内流」ではない——言い換えれば、神の御声ではないのであつて、「眞の自己」の仮面を被れる「ニセモノの自分」の啓示でありますから、そんな啓示に従つてはならないのであります。「良心」はわれわれの中に宿る自己神格の内流でありますから、われわれは「良心」を捨ててはならない。神示はいわゆる「良心」よりも大きく、広く内外全包的に出てくるところの内部的光耀こうようであります。それは本質において良心と同じき本源から流れ出て来るのでありますから、良心のささやきに一致しないものは決して神示ではありません。それは、ある低級靈の示唆か、ニセ物の自分のいい加減な潜在意識のささやきにすぎないのであります。

われわれの「生命」は本源において神と同一流れの「生命」

を汲んでいるのでありますから、われわれがその本源に対して心の堰^{せき}を設けず、できるだけ、心の耳を傾けてその本源の知恵に聴くようにしますならば、われらにとって必要なあらゆる知恵はわれらの心に流入してくるのであります。

われわれは窓を開いてただ眺めればよいのであります。美しい世界は窓を開かなくともすでに窓を開く前からそこに展開しているのです。ただ窓を開けば、その美しい世界の光景が自分のものとなるのであります。これは実相の理想世界はすでに在る——われらが心の窓を開ければそれが現実世界のものとなることの譬^{たと}えであります。と同時に、これはまた、神の知恵がわれわれの内に流れ込んでくる事実の譬^{たと}えであります。だから、心の窓を開きなさい。そうすれば神の知恵があなたの知恵となるのであります。心の窓を開くにはどうしたらよいかと言いますと、心の窓を閉めている扉とはなんであるかを知らねばなりません。心をとざしている扉がなんでできているかを知らねばなりません。心をとざしている扉とは、人間の小知才覚であります。人間の小知才覚を捨てるのが心の扉を開くことになるのであります。「生長の家」の健康学は大バカの健康学だと言われています。大バカと大知恵者とは一致するのであります。いろいろと生理学や医学の最新の衛生学を捨てて、聖典『生命の實相』に書いてあるとおりに信じえ、実行しえた人々が、医療不治の病から回復した実例が頻々^{ひんひん}としてあるのは、人間の小知才覚を捨てたとき、本当の知恵神の知恵、いっさいを生かす知恵がその人の内に流れ込んできたからでなくてなんでしょうか。

聖典『生命の實相』に示されている真理を体得し、これを信じ、生き、動くとき、医療不治の病が解決するばかりではなく、経済の問題でも、社会の問題でも、家庭の問題でも、すべての問題が解決するのであります。なぜならこの聖典に示されている神の知恵は無限であり、神の子なるわれらの実相のうちにはいっさいが備わっているからであります。「人間の本質が神の子であり、自己のうちに知恵でも、愛でも、生命でも、供給でも、いっさいが無尽蔵に内在する」という真理を信ずることができない者は、これらの完全なる供給の神流れを受け容れることができないのであります。すなわち神の知恵、供給が乏しいためにわれわれはことごとくに失敗し、愛の供給が乏^{とほ}しきゆえに、家庭の愛情や知友の交わりが疎遠となり、生命の供給が乏しきゆえにいろいろの病気が形をあらわし、もの皆の供給乏しきがゆえにいっさいが豊富に集まらないのであります。

自己の内に埋蔵されたる無限無尽の供給を知らないものは、自己に対して罪^{つみ}（包^{つみ}）を犯すものであります。他に対して内に埋蔵されたる無限無尽の供給を知らしめない者は、他に対して罪（包）を犯すものであります。およそ布施^{ふせ}のうちで何か最も大きな布施であるかと言いますと、彼自身の内に埋蔵されたる無尽の宝庫に目覚めさせてあげるほど、偉大なる布施はないのであります。外から金銭財宝などを施^{ほどこ}してあげる布施は、使い尽くしたらやがて「無くなる」ものを施すのであります。内在無尽の宝庫を目覚めさせてあげれば、もうそれは無くなることはない、使い尽くしようがないのであります。

諸君は有限な人間の内に「内在無尽の宝庫」などがあるはず

がないと思われますか。人間を有限だと見るものは、それは神の子であるところの実相人間をみないで、かりのあらわれ仮現であるところの肉体人間を見ているからです。「井の中の蛙」の喩えをご存じでありましょう。ある所に一群の蛙が井戸の中に棲んでいたのです。この井戸のかまち框は険しく、広い眺望は決して見られないで、ただ青空の一角を眺めうるのみでした。ある日、湖に棲んでいる一匹の蛙が通りすがりにこの井戸まで来まして、井戸の根から下を見下しました。「そこから覗くのは誰です？」と井戸の中から一匹が声をかけました。「湖から来た蛙だよ。お前は どうしてこんな狭いところに棲んでいるんだい」と湖の蛙は上から声をかけました。「湖？ 湖ってなんだい？ どこにそんな処があるんだい？」と井戸の中からたずねます。「湖って水のたくさんある処だよ、そんなに遠い処じゃない、ここへ散歩に来られるくらいだからな」。「湖は大きいかい？」。「大きいとも、ずっと大きいよ」。「どのくらい大きいのか？ この石の大きさくらいかい？」井戸の框をなしている石を指差しました。「なんの、そんなに小さいものかい。」「それではこのくらいだろう」と言って古荘戸の中へ欠けて落ち込んだ板片を指差しました。「そんな小さいもんじゃないよ。」「それではこの井戸全体くらいはあるのか、それほどないだろう。」「なんの、なんの、この井戸全体の百億倍からある広さだよ。ここからでも湖が見えているよ、ここまで来てごらん、湖を見せてあげるから。」

湖の蛙がこう答えると、井戸の中の蛙はなかなかそれを信じません。「そんなバカなことがあるはずはない。お前は嘘つき

にちがいない。わたしたちをだまして、何かしようと企んでいるにちがいない。もう決してだまされやしないぞ。帰れ、帰れ」と、けんけんごうごう喧々囂々、井戸の中の蛙は声をそろえて鳴き叫び始めました。

この寓話を読んで、諸君はなんと思えますか。井戸の框を一步外へ出たならば、そこに海があり、その海がいかに広く、その生活がいかに広々と自由であるかがわかるのです。

「真理はなんじを自由ならしめん」です。われわれは皆各自が神の子なのでありますから、本来自由自在なひろびろとした大海に住んでいるのでありますが、それが不自由な、不満足な、窮屈な、万事において不足な世界に住んでいるのは、それはこの譬え話の「井の中の蛙」と同様で、みずからあざむいて、真理の大海へ出ることを拒んでいるからであります。まずわれわれは小さな井戸から外へ出てみる必要があります。この「小さな井戸」に譬えたのは「人間の小知才覚」であります。われわれは人間の小知才覚から出てみなければ、自己が神の無限無尽の大知恵をみうるものであることが解らない。解らないでいながら、神の大知恵の大海がないなどと言っているのは、自己をみずからあざむいているのであります。

人間の真の発達は、神の無限無尽の大知恵に内部から繋がることにより、それが外に形にまで顕われてくることによってであります。内部からの無限の供給に栓をしておいて、外部へばかり栄えをあらわそうとしているのは、植物に地下水を与えないでいて、外部に美しい花や葉を咲かせようと焦っているのと同じであります。根のない植物は外を茂らせば茂らせるだけか

えってかれます。われらは植物を移植して根が傷ついていましたならば、しばらく根が十分回復するまで外部の枝葉を切り込んでおくのであります。根を培うのには外部の枝葉を一時切り込んでおくことが必要なのであります。すなわち外面的な「人間知恵」を一時すっかり捨てると、そのうちに内部に根がはびこって、その根の力で、今度は本当に外部にも善い知恵が芽を出してくる。これなら、外部に出て来る知恵でも本物の知恵であって、本源の地下水につながっているから涸れようがないのであります。

もしわれわれが日常生活に採るべき道を誤り、病気に罹^かつたり経済的に失敗することがありましようとも、それは神の大知恵の地下水が足りないからではない、神の大知恵の地下水を吸収する根をはびこらせていないからであります。神が悪いのではない、自分が悪いのであります。欠点は自分にあり、失^{しつ}錯^{さく}は自分にあるのでありますから、これを治す道は、神を怨むことでも、神に対して号泣することでもない。自分自身の「根」を培って、神からの地下水の供給を吸い上げるようにすればよいのであります。他^{ひと}がしてくれるのなら、たよりなくて当てにならないかもしれません、自分がするのでありますから、確実で造作がないのであります。

われわれがもし、常到大知恵の地下水から、日々の知恵の供給を受けるようにしていましたならば、決してかくのごとき失敗をなすことはないのであります。なぜならわれわれの魂の内部から光が射^さしてきてわれわれを導いてくれるからであります。その光は、永遠に導き誤ることのない無限に完全な神の知

恵の光であるからであります。

諸君がもし、外部的にあらゆる方面に解決を求めてなお解決の道に迷うような問題に直面した場合には、よろしく静坐「神想観」して、「神と一体なるところの自分はすべての事物と調和している。さればこの問題を解決するに適當なる知恵は、おのずから自分の内に湧き出てくる」としばらく祈り念じて、心のうちに湧き出てくる啓示に従えばよいのであります。『生長の家』の誌友で、紛失物をどんなに捜しても見つからない時、神想観をして精神統一せし後、やおら起^たつて最初にあけてみたところに、その探す品物が見いだされたというような実例はたくさんあるのであります。

われわれが毎朝神想観して「今日の仕事に必要な知恵は神の大いなる知恵の海から流れ込んで決して失敗はない」と繰り返し念じつつ精神統一に入り、しかるのち実際の仕事に出かけるならば、必ずその仕事を最善に解決する知恵が湧いてくるのであります。この点において神想観はわれわれにとって日々の精神的パンであるとも言えるのです。われわれの生活には物質的パンも必要ではありますが、精神的パンはなおさら必要であります。その日その日の最善の知恵が、毎朝の神想観によって湧いてくるとしますと、もうわれわれは前日から明日の問題について思い煩う必要はない、「一日の苦勞は一日にてたれり」もうわれわれは明日のことについて思い煩い、そのために不眠症になったり、神経衰弱になったりする恐れはないのであります。

われわれの霊は神より来^{きた}れるものであって、その本源なる無限の霊に溶け込み澄みきるとき、必要に応じてすべてのものは

知らされるのであります。この事実を認めるときわれわれはすべての取り越し苦勞から解放されるのであります。必要に応じて必要なすべてのものが知らされるとしたならば、なんのために取り越し苦勞の必要がありません。「取り越し苦勞をするな」と申しましても取り越し苦勞をせずにはおられぬと言う人がありますが、それは必要な時に応じて必要なすべてのものが知らされるということを本当に信じえないからであります。だから「取り越し苦勞をするな」と言うよりも、「われわれは神より来れる神の子であつて、全知の父から必要に応じて必要なすべてのものを知らされる」ということを自覺させてあげる方が根本的なのであります。この自覺がありましたら、われわれはどんな時にも取り越し苦勞をしない、本当に常に平和な心境を持続することができるのであります。

必要に応じて必要な事物を与えたまい、必要に応じて必要な知恵を与え給う全知にして無限愛なる神を信ずることができないために、この世のいかに多くの人々が常に不安に迫り立てられ、恐怖の虜となり、あなたこなたに救いを求め、あちらで金をとられ、こちらで財を奪われ、日ごとに肉体の生命を縮めていることでありましようぞ。すべての供給は神より来る、本当の平和は神より来る、そして、その神は、宇宙に満つる無限の供給であるとともに、その無限の供給は、内面においてわれらにつながっているものであるということを知るときにおいてのみ、本当の平和、本当の安心がわれわれの魂を領するのであります。

されば本当の魂の平和、魂の幸福、至上の安心は、外に求め

てこれを追い廻している限り得られるものではないのであります。物があれば取り越し苦勞はなくなるであらう、金銀があれば心配がなくなるであらう、家があれば不安がなくなるであらうと、物を貯め、金を貯め、家を造ってみましても、取り越し苦勞も、心配も、不安も、無くなりはいないのであります。形あるものは、それは心の世界にその形を持続する力がないとき、すみやかに崩壊し始めるのであります。それは靈たましいの脱けた肉体がすみやかに崩壊し始めるのと同じであります。だから、内にそれを持続しうる心的迫力なしに、形の方面から、「物」を、「金」を、「家」を、「財」をと、形を持続しようという工夫努力は、結局奔命ほんめいに疲れて神経衰弱を起こすにすぎないのであります。

だから多くの宗教では、「物」や「金」を人間の執着を増し、苦しみを増すものとして忌み嫌い、それから遠離することを勧めているのであります。しかし、「生長の家」では、多くの宗教のように、「物」や「金」を忌み嫌いはしないのであります。「生長の家」では、「物」や「金」をそれ自身は存在しないもの、それは心の影にすぎないものとするのでありますから、それはあつても無くてもよい、有り過ぎてても遠離する必要もない、無くなつても追い廻さねばならぬ必要もない。心が豊富になれば自然に物も豊富になる。心が固定すれば、自然に物も固定する。しかし、心は、もとこれ神より出でたる自由自在ゆうじゆうむげ融通無碍ゆうづうむげのものでありますから、固定した富の蓄積というもの、心本来の融通無碍の状態をあらわしているのではありません。必要に応じて豊富に裕かに固定せずに流れているのが、自

由自在を得た心の投影^{かげ}としてあらわれている富の状態でありま
す。肉体でも同じことで、肥えているから健康なのでもなけれ
ば、便秘しているから健康なのでもない。豊かにエネルギーが
流れ入り、流れ出で、交代してとどまらず、新陳代謝が完全に
行なわれているのが心の自由な人の、その自由な状態が肉体に
あらわれた健康状態なのであります。

ともかく、ふつうの人たちは、物でも金でも、体力でも、「外」
の工夫を凝らして心に思い煩った結果、やって来るものだと思
っていられるかもしれませんが、そんなにして得た物や金や健
康は一時実現しても、それが心の世界に根を張っていませんで
したら、すみやかに崩壊してしまうのであります。本当の富で
も健康でも、すべての供給は魂の奥底で深々と神と繋がること
によって、自然にわたくしの巧みならぬ工夫が、自分自身の内
部からも、自分の環境からも動き出してきて成就するものであ
りまして、これならば、他の世界で神という無限供給の中に根
を張っているのでありますから、ひとから見たら、危なかしそ
うに見えていても、これほど安心なものはない。走馬燈に走る
馬は、消えたかと思うとまたあらわれる。これは中心に光があ
って、その光の周囲に馬の影絵の元が刻んであるからでありま
して、その元の絵が壊けない限り、消えたかと思うとまた現わ
れて、去ったかと思うとまた入り来る、すなわち、消えてしま
いきりになるものではない、決して走りきりになってしまうも
のではない。流れ入り流れ出でて止まらない、無限の供給につ
ながっていることが解りますから、心は現象の移り変わりとと
らわれず、平和に続いてゆくことができます。また

実際必要な供給が必要に応じて流れ込んできまして、知恵で
も、生きる力でも、「物」でも、「金」でも、必要なときに欠く
ことはなくなるのであります。

これをわたし自身を例にとって申しますならば、毎月の『生
長の家』は最初数年間は、わたしが会社へ行きながら書いたも
のであります。昭和七年の八月、会社を辞めるようになるまで
は、読者の数も少なく、発行部数も少ないために誌代としては
収入があまり無く、毎月その出版費を会社からもらったサラリ
ーでまかなっていたのであります。ところがわたしが会社を辞
めるようになりますと、どんなにして谷口は生活をしてゆくだ
ろうといろいろな心配してくれた人もありましたが、わたしは自
若として動こうとしないのでした。そしてただ『生長の家』を
やり続けたのであります。すると自然に誌友の数が少しずつで
はありますが、殖えてきました。そのほか聖典『生命の實相』
の方は、雑誌の方の五倍も十倍もの速力で出て行きました。『生
長の家叢書』の方は百倍もの速力で出て行きます。むろんこう
いうものは、そう収益になるものではありませんが、それでも
たくさん動いているうちには、その中から維持費に必要なだけ
ははいるようになったのであります。今は執筆と講演のほかは、
経営も出版も他の人にまかせて、自分は教え一筋になっていて
楽であります。その時分は維持費のことも考えなければなら
なかったのです。維持費のたりないような時には、聖典を読ん
で病気が治ってありがたいから、経営費の一端に加えてくださ
いと言って、どこからともなく送金してくださるような方も出
てくるようなこともあり、出るに必要なだけは、流れ入り流れ

入りて止まらず、循環流通自在にして、まことに「生命の實相」の小さな具象化がわたしたちの生活の上にあらわれることになってきたのであります。

先日、ある人が来られまして、自分は「生長の家」を知るまでは毎月三十円以上は医薬に支払いがあり、その上、治るか治らぬかといういろいろ心配したものであったが、「生長の家」を知るようになってから、六ヵ月間に薬といって支払ったのは二円何十銭であつて、それも外用薬にすぎなかったというようなことを話されましたが、そういう人は『生長の家』の誌友にはザラにあります。ザラどころではない、百人がほとんど百人ながらそうらしいのでありますから、その喜びというものは非常なものでありますから、そういう人が「生長の家」をほっておかない。なかには博士数人が立ち会つても駄目だと宣告されたような病人などもずいぶん治つていたのでありますから、その助かった人の喜びというものは金などには換算できない無限の価値がある。これがみんな天の倉に貯えられ、必要な時にいつでも供給されることになっているとも言えるのでありますから、「生長の家」は貧しくとも無限の富をもっているとも言えるのであります。必要に応じて呼べば富が出てくる。富というものはそんなにたくさんわたしの手許に固定させておいても腐つて困るものでありますから、わたしはむやみに富を呼ぶことはありませんが、子供がお菓子や果物などを呼ぶことはおうあります。わたしの子供はお菓子が欲しい時には大空に向かつて、「お菓子を呼んでこい」と言っていることがあります。すが、すると不思議にその日またはその翌日には、必ずお菓子

を誰かが持つてきてくれるのであります。果物が欲しくなれば「果物を持つてこい」と大空に對^{むか}つてとなりつけるとその果物を誰かが持つてきてくれるのであります。キリストは「この山にかしこに移りて海に入れと言え山が動き出して海に入る」と言つたそうでありますが、われわれ親の言うことを見聞して、單純に信じている子供の信仰は素直で正直でありますから、信仰が純粹で權威がある、それで子供の信仰の單純さで大空に對つて、欲する物の名を呼び、「何々よ出^いで来^{きた}れ」と命ずれば、それが成就するのであります。これが信仰と言葉の力でありま

す。われわれの言葉の力を極度に發揮するには、われわれは子供の單純さをもつて、自己と、無限供給の源泉たる眞の神とが、眞に一つに繋がつていゝものであるという眞理を信ずることが必要なのであります。『生長の家』の誌友で、「生長の家」の信仰に入るまではことごとくに生活が思うようにならず、事業に蹉^さ跌^{てつ}し、自分も家族も始終交代に病氣にかかつていられ、悲觀のどん底に落ちておられたような人が、ひとたび「生長の家」の信仰に入り、生命と知恵と愛との無限供給の大源泉であるところの眞の神との一体觀に入られて以来、自分も家族もすっかり健康となり、事業はトントン拍子に成功し、昔日^{せきじつ}の悲觀いずこにありやと言ふように平和そのものの、樂觀そのものになつていられるような方はたくさんあるのであります。心一つが、眞の神に結ばれるのと、眞の神を知らぬのとではこれほどの相違があるのであります。

眞の神を信ぜよ。信じしかして、諸君の願いを神に委^{まか}せよ。

肉体の人間は諸君を裏切っても、神は決して諸君を裏切るということはないのです。本当に信じないから、半分の結果しか得られないのです。神よりも確実なものはどこにもないのであります。信じて

寄り頼るものの願いは必ずきかれるのであります。だから人生の勝利者となり、常に心平和な豊かな生活を送る秘訣は、夜となく昼となく神を呼ぶことであり、神に常に呼びかけ、神と自分との一体感を寸時も失わないことであります。われわれは目が覚めている間だけ神から導かれ守られているのではたりない、眠っている間にも神から導かれ守られている。現にわれわれは眠っている間も心臓は鼓動し、肺臓は呼吸し、血液は循環し、老廃物は排泄され、新細胞は造られている。いな、われわれは起きている間は、かえって外界のことに心を奪われているので、内界に行なわれている神の啓示に気がつかないのであります。眠っている間は、心は外界の移り変わる事物に奪われるということはないのでありますから、かえって内界の神の啓示を明瞭に受けることが多いのであります。

われわれの睡眠中、眠っているのはただわれわれの外界がいがいに処する機関のみであります。内界ないかいに処する機関は決して眠らないばかりか、心の持ち方に従って、より多く内部の啓示を聴くことができるのであります。

ふつうわれわれの肉体は「物質」であると言いますが、物質と言いますと、われわれの五官に触れる程度の一種粗雑な振動数限界のエネルギーの振動を言うのでありますが、五官に触れ

ない種類のエーテル波動が無数にあることは最新物理学の立証せるところでありますから、われわれの五官に触れない程度の精妙な振動数の体をもわれわれは持ちえないとは言われないのであります。実際、近代心霊科学者の研究せるところによりますと、われわれは肉体のほか、エーテル体とか、幽体とか、霊体とかいういろいろ精妙な体を備えているのであります。肉体そのものの振動数も、粗雑な不純な事物をなるべく思わないようにし、静かな平和な善き思念ばかりをなるべく思うようにしていますと、肉体は「念が形にあらわれた体」でありますから、その念の浄化とともにしだいに精妙化されてきます。して、五官をとおして外界の事物を知る以外に、もっと精妙な波動——霊からの啓示はもちろん、神からの啓示の波動というような精妙な波動をも感受することができるようになります。

肉体が、常に浄らかな念によつて浄化されてきますと、念波の浄化作用により、肉体組織が重濁粗雑じゅうだくそさつな組織からしだいに精妙清澄な組織にまで進化してきますから、それに伴って、それを養うに必要な食物の性質も、しだいに濃厚な肉食から軽い菜食に変化してくるのであります。肉食が悪いとかよいとか言つて菜食に転ずるのでは、まだ不自然であります。肉体そのものの組織が精妙清澄なものに変わつてきて、それにつれてしだいに淡泊な食物を要求するに至るのですから、最も自然なのであります。

念が浄まつてきまして肉体の組織が浄化してきますと、食物に対する嗜好が淡泊になると同時に、肉体の感覚を不自

然に薬品によって興奮せしめたり、麻醉せしめたりすることに
よって、魂の不安な寂寥^{せきりよう}を慰める必要がなくなりますから、
アルコール飲料やタバコに対する嗜好が自然にその人の日常か
ら剥落^{はくらく}するか、最も適当な分量に自然の嗜好が調節されてくる
のであります。生活や嗜好がなんでも不自然なのは心に不調和
があるからです。習慣にもありますが、人と対談する際にしき
りにタバコを吸うのなども、どこか自分の心に淋しい不安なと
ころがあるので魂の不安を麻醉させて心をユツタリさせたいと
いう自然の欲望でそうなるのであります。「生長の家」は努力
して嗜好品を止めよという禁酒禁煙論者ではありません。本当
に魂が平和な調和したものになってきましたら、その程度に従
って、嗜好が自然に変わり、そういう不自然な嗜好が剥落して
しまうというのであります。心が生命の実相を悟り、真に平和
の心境に常に安住いたしますならばその心のリズムが具象化し
まして、肉体の組織までも精妙^{リファイン}化されたものとなります。それ
に従って飲食物の嗜好も変わり、しだいに淡泊な食事を要求す
るようになります。その飲食物の分量も多量に必要としない
ようになります。つまり、肉体の組織が精妙になりますから、
食物が人間のエネルギーに変ずるまでの工程に浪費がなくて少
量の食物で済むようになります。また、体組織自身の効^{エフィシエンシー}率
も高まりますから、疲労も少なく短時間の睡眠でこと足りるよ
うになるのであります。

肉体とはわれわれの念の振動中、五官に触れる範囲の粗大な
念波振動の形象化でありますが、粗大な念波振動で成り立つて
いるだけに摩擦があり破損があり、したがってそれを休息せし

め修理するために睡眠を必要とするのであります。が、われら
の靈魂の座であるところのいつそう精妙な波動で成り立つ幽体
は、その組織が精妙でありますから、それを使用しても摩擦が
少なく休息修理の必要が少ないので、おおむね睡眠を必要とし
ないのであります。近代の心霊科学の実験的研究によりまして
も、臨終のショックによって、死後長く睡眠している靈魂体す
なわち幽体は低級の靈魂の幽体でありますが、高級の靈魂の幽
体は臨終のショックに煩わされず、幽界においてすぐ覚醒状態
を維持するものであることが立証されています。すなわち高級
靈魂の幽体は同一のショックを受けても、その破損の程度少な
く睡眠によってそれを修理する必要がないのであります。それ
で肉体でもそれを構成している念波の種類が精妙なものになっ
てきますと、睡眠時間がきわめて少なくてすむようになってく
るのであります。

われわれの肉体と、幽体と、靈体の生命波動が念の浄化によ
って、粗大なる振動より精妙なる振動へと進歩してゆくことを、
われわれの生命（現象生命）の生長と言うのであります。靈体
や幽体がふつう、肉体の感ずることができない波動を感ずるこ
とができるのは当然であります。われわれの肉体でもその波
動が精妙となるにつれて、ふつう五官では感ずることができな
いところの波動を感ずることができるようになるのであります。
す。肉体が浄化の極に達しますと、肉体の振動数が靈体と同一
振動数圏内に到達し、肉体そのままで靈体になることもできま
す。こんなことはまれな例であります。できないことではな
いのであります。日本では古来「屍解仙^{しげせん}」と称して、屍体を残

さないでそのまま霊界に入る人がありますが、これなどは肉体が不断に浄化せられている結果、肉体の振動数が霊体と同一振動数圏内に達しているのです。振動数のまったく異^{ちが}う肉体を捨てざる必要なしに、霊界へ入ることができる。これが「屍解仙」であります。

常に神想観を修行し、心を神に一致せしめる習慣を養い、生活の仕方を「生長の家の生き方」に順^{したが}わせてゆきますと、リファインされた心のリズムに従って肉体の波動が浄化し、より高き世界からの啓示を肉体にも感受することができるようになるのであります。神想観中、または睡眠中はわれわれの肉体は日常生活中の粗大な事物を思い煩わず、その結果、われわれの霊体は霊界靈魂の世界または時として神界の啓示を受けやすいのであります。惜しいかな、肉体の波動が霊界の波動ほど精妙ではなく、波長が合わないために、せっかくわれわれの霊体が受けた啓示も、自己の肉体意識にこれを生かすことができず、日常生活に利用することができないために捨てられてしまうことが多いのは残念であります。

だから、霊界の啓示をわれわれが利用することができるためには、常に心のリズムを静かに静かに調えて、霊界または神界のいっそう精妙な精神波動を感受しうるように、肉体のリズムをリファインされた精妙なものたらしめておくことが必要なのであります。

死の刹那の精神波動が、近親者に達してその姿を顕わしたりする実例はおうおうありますが、死の刹那でなくとも、睡眠中は、われわれの霊体の一部分は肉体から遊離して、靈魂の世界

に入り、より高級なる靈魂よりの啓示を受け、その啓示を持ち帰って、これを肉体の意識に通ずることがおうおうあるのであります。

ある新聞記者の実例について申し上げますならば、彼はある日の夕方、編集長から、翌朝までにある問題についての論文を書くように命ぜられました。彼は全然その問題については素人でありますので、いろいろその論文の材料を捜しましたが、急のところではあり、てきとうな材料が見つからないので、どうしたらよいかとまったく困惑してしまったのであります。そこで彼はついによいことを考えついたのであります。よいことというのは、その問題を「静」の中へ預けておこうということであります。彼は静かに「神は全能の知恵であるから何事でも能わざることはない。わたしはこの問題を神の知恵の中に預けます。どうぞ明朝起きましたならば、この問題についての善き知恵を与えてくださいますように」と祈って眠りました。彼はグッスリ熟睡しまして、翌早朝目が覚めましたときに最初に心に思い浮んだのは、前夜来「静」の中へ預けておいた問題でした。しばらく静かに彼は心の中を眺めていましたが、昨夜あんなに考えても行き詰った論文が、心の中にちゃんと順序よく並んでいることに気づきました。彼はそのまま寢床で筆をとって心の中に浮かんでいる論文を筆写しました。それは実に名論文であったというのであります。これに類する例は誌友にもよくあることで、高知の誌友武内静子氏が（この人は神想観をして肺病の治った人であります）、産婆の受験をしましたときに、口頭試問で自分の全然知らない問題が出た時に、受験前に神想観を

していたために、口をついてその回答が出て来て、その試験に及第したというような例もあります。

肉体が物を探^{たず}ねて発見するのは物質界の現象であり、霊体（または幽体）がある高級霊魂から啓示を受けたりするのは靈魂界の現象ですが、かかる現象を起こしている本源はなんであるかというわれわれの「念」であります。「念」が元ですべての現象が起こるのであります。「念」が動いて肉体が動き、念が動いて霊体が動く。物を搬^はぶのも念の力でありまし、霊魂が啓示を受けるのも自己の「念」整うて初めて「正しい啓示」を引き寄せるあるいは自分の方からその「正しい啓示」に吸いついてゆくことになるのであります。「念」が整わねば、目を覚まして鵠の目鷹の目で欲しいものを捜し廻っても見つからないのであります。「念」が整えば、静坐「神想観」中にも、睡眠中にも欲するものが近づきつつあるのであります。これを「類は類を招ぶ」念の牽引力と言っているのであります。

本篇第一章に就眠前十分間の神想観を勧めてありますが、覚醒中はわれわれの「念」が外界の事件の移り代わりに氣をとられて刻々変化いたしますので、「念」を常に一定傾向にとどめておくことは比較的むずかしいのであります。睡眠前に神想観をして、「念」を正しい傾向に向けておいてから眠りますと、念の習慣性によりまして、「正しい念」を習慣的に持続して、類は類を招ぶ「念の牽引力」によりまして、睡眠時間中持続的に正しい念、栄えの念を招び寄せ、その念の展開として、平和な事件、幸福な事件、繁栄の事件などを引き寄せることになるのであります。

神想観中の思念にはいろいろのやり方がありますが、本篇第二章に述べてあるのは、その基本的な形式でありまして、この形式で一、二カ月習熟していただきましたら、呼吸の方法は習慣的に正しく静かになってきますから、その時にはもう呼吸にとられず。

「実相」の完全円満な相を念ずるということにしたいたのであります。その一方法としては本篇の「扉のページ」にある「実相を観ずる歌」のごとく念じていただくのであります。あの歌の文句のとおり、または自己の素養に従って、自己に最もピッタリする言葉でそれと同意味の念をば繰り返し繰り返し念じているうちに、自己拡大の感が起こり、「実相即我」「宇宙即我」の境地に入り、小我なく、他我なく、いっさい包容の大我に帰入した感じを味わうにいたるのであります。神想観は「術」ではなく、「徹底祈り」でありますから信念が通ずれば、形式または用語にとらわれる必要はなくして十分効果があるのであります。なお、同信としてわれらの光明思想運動に御参加の方にはくわしく生長の家本部で直接御指導申し上げます。

次にはある問題について神の示しをつける一つの思念法をお話いたします。よう。（神示と言いましでも靈聴または靈視的に神示が来るとは限らないので、「神はすべて」でありますから、神想観とともに全体の事件がひとりで廻転してよき解決に導いてくれることもあります。）まず招^{かみよびうた}神歌四首を黙^{もくし}誦^{じゆ}または朗^{ろうしやう}誦^{じゆ}したる後、「実相を観ずる歌」を数回心に念じて、自己の心を無限の平和におき、

「神においてわれすべての物と一体である。われすべての

ものと和解し、われすべて

のものを赦したのである。われとすべてのものとの間に怒りもなく、憎しみもなく、

完全に平和であり、本来の一体に帰ったのである。」

こう繰り返し三、四回念じて、少しの怒りも憎しみも不安も恐怖もない、本来一体の平和の心境にジーツと坐することになります。そしてその心境に達したとき。

「われすべての物と一体であるから、すべてのものわがために動き、すべての知恵わがために導くのである。」

こう繰り返し、繰り返し念じつつ宇宙に満つる無限の知恵と一体であるとの感を十分に起こして、やがて「必ず神はわがために必要な知恵と動きとを与え給うものである」との深き大安心の期待の心を起こし、その神の導きにわがすべてを没入しきった心持を、ふかぶかと心の中に起こしてから神想観を終わし、それが就寝前であれば、まかせきった気持で安心して寝てしまふと、翌朝以後に神の導きが、知恵の上にあらわれてくるのであります。

諸君の願いが、他を害しない願いであれば、この神想観中、自分自身を良化するための導きであらうとも、決して遠慮することなく、神に呼びかけて差しつかえないのであります。自己の希望を神の大腹中に安坐させた気持になり、われが天地そのものであり、天地全体がその希望実現のために動き出している、天地全体の力がわれに生きているという心境になるのであります。かくのごとき心境になり、万物と調和し、神と調和した念になる限り、われらに善きことの実現しない道理はないの

であります。神は決して神の子たるわれわれの願いを拒絶し給うことはないのであります。

生命の實相 谷口雅春 日本教分社